

# 樹木と絵画の交差点

## 第 13 回 ～円山応挙とフジ～

円山応挙は、江戸時代中期から後期にかけて活躍した絵師です。写生をもとにした細密描写と優美な画風で一躍京都の人気絵師になりました。

愛くるしい子犬、孔雀、虎、龍、滝、子供、山水図など…、応挙はあらゆるモチーフを的確に描くことができる絵師でした。応挙は樹木の表現でも新しい技法で斬新な境地を切り開き、名作を産み出しています。



### 円山応挙 (1733-1795)

独自の細密描写を産み出した江戸時代の巨匠。狩野派や中国の古典や、西洋の遠近法に学び、あらゆるモチーフで高い技量を示した。

「朝顔くしず 狗子図 杉戸絵」(部分) (1784 年)

東京国立博物館蔵

## 写生の祖

当時の画壇は狩野派が主流で、ほとんどが絵手本を基礎にして描かれていたため (参照 : 樹木と絵画の交差



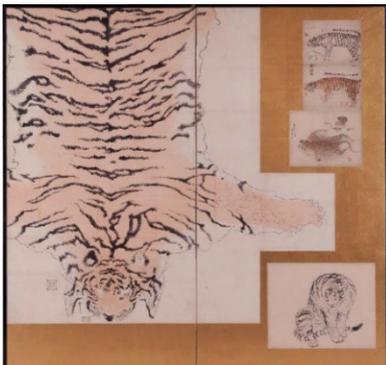
点 第 11 回「桃山絵画と樹木」1 ページ)、リアルな描写からは程遠い表現でした。そんな中登場した応挙の細密描写は、当時の人々に新鮮な驚きを与えました。「雨月物語」で著名な同時代の文人・上田秋成は、「応挙の出現により京中の絵師が応挙風 of 作品を描くようになった」と書いているほどです。

### 孔雀牡丹図 (1771 年)

相国寺承天閣美術館蔵

重要文化財

応挙は膨大な写生を基に“そのものらしく、美しく、分かりやすく”、特別な絵の知識や解釈がなくても分かる絵を描きました。町民文化が開花したこの時代に応挙が人気絵師となったのもそういった理由からかもしれません。応挙は写実表現とともに、当時まだ浸透していなかった遠近法もさりげなく画面に取り入れました。例えば上の作品(「孔雀牡丹図」)では、孔雀が立っている岩は面が分かるように3面が見える角度で描かれています。それによって孔雀の足元に空間が生まれ、孔雀の尾羽根も手前にふんわりと現れ、羽根の細密描写も生きて見えてくる…そんな工夫もされています。当時実物を見ることができなかつた虎の絵を描くときは、虎の毛皮を取り寄せて綿密に写生しました(下図「虎皮写生」)。出来上がりはどこか可愛らしい虎になっていますが(猫も参考にしたのでしょいか?) それも味があります。



### 左図 : 虎皮写生 (18 世紀)

本間美術館蔵

### 右図 : 虎図 (1783 年)

洛東遺芳館蔵

## 樹木を見つめる技術

樹木の視覚的表現にも応挙独自の工夫があります。下図の2作品（「雪梅図襖」「雪松図屏風」）は、ウメとマツに雪が降り積もり、情緒ある冬の景色が描かれています。細部をよく見てみると描き方に工夫が凝らされていることが分かります。2作品とも、枝に積もる雪の部分は白い絵の具を塗るのではなく、何も描かない紙のまま生かされていて、線は ①筆全体に淡い墨を含ませ、②加えて先端にだけ濃い墨を含ませ、③一筆で先端と根元の濃淡のグラデーションをつくる、という水墨画の技法(「付立」)で描かれています。応挙はこうした技法をさりげなく駆使して、ハッとするような新鮮な画面をつくりました。絵に意味を求めず、ただ見て感じれば良い。応挙の絵はそう語っているようにも思えます。その分かりやすい美しさは、本質をとらえる観察眼と空間を捉える技術に裏打ちされたものなのでしょう。



雪梅図襖 (部分) (1785年)  
草堂寺蔵



雪松図屏風 右隻 (1786年頃)  
三井記念美術館蔵 国宝



【技法「付立」の解説】  
赤丸内が「付立」の技法を使っている一部分。白い部分は紙の色を残している。  
まっさらな白い紙に濃淡をつけた墨が染み込んでいて、その長い一筆のストロークで枝の丸みと積もる雪の両方を表現している。

雪景色と樹木、誰しもがいつか見た覚えのあるような冬の情景を描いています。

雪という“白くふわっとしたものをどう絵で表現するか？”の問いに応挙は、“輪郭線をつけると絵が固くなってしまふ”と考えたのではないのでしょうか。「付立」の技法で描かれた枝は雪を見事に表現しています。紙を白く残した部分は、サクサクとした雪の質感が感じられるようです。枝にググッと思い切り良く引かれた運筆と針葉の細かく鋭い線の対比も心地良いです。

「雪松図屏風」(下図) はやがて来る春に向けて寒さに耐え忍ぶ老木の姿。背景の金泥のきらめきは、太陽光がさしこんで、これから始まる雪解けの吉兆のようにも感じられます。



**松孔雀図  
右隻**  
(1795年)  
大乘寺蔵  
重要文化財

得意の孔雀をモチーフにした襖絵、十六面のうち四面。金地に墨一色で表現しているにもかかわらず、ほのかに色彩が感じられるようです。前ページの「雪松図」と同じマツがモチーフですが、それとはまた違う雰囲気、金地の背景が大気そのものになっていくような、神秘的な雰囲気を醸しだしています。応挙独特の乾いた美しさを感じられる作品です。

## フジの存在感

屏風絵のように大きな部屋に飾る絵は、遠くから見るのが想定されます。応挙は「遠目の絵」ということを念頭に入れて制作しました。細かいところを描き込まず、全体のバランスに神経を注ぎながら勢いで仕上げ、遠くから見たときにこそ真実らしく見える絵。応挙の傑作「藤花図屏風」(下図)はまさにその境地で描かれました。細密描写とは違うアプローチで、フジの儂い存在感を描き出しました。

フジの長い花房が重力に従って垂れて、しんと静かな描写に対して、曲がりくねった幹は付立の技法を使い勢いよく即興的に描かれています。幹は簡単に描いたように見えますが、遠くから見てこそ立体感を感じさせる描写です。ノダフジは自立しづらく通常は棚を必要としますが、応挙はあえて棚を省略しフジの存在感に焦点を絞って表現しました。この屏風が飾られた部屋にはフジの凜とした生命力が満ちたことでしょう。応挙美学を代表するフジの絵です。



**藤花図屏風 右隻**  
(1776年)  
根津美術館蔵  
重要文化財

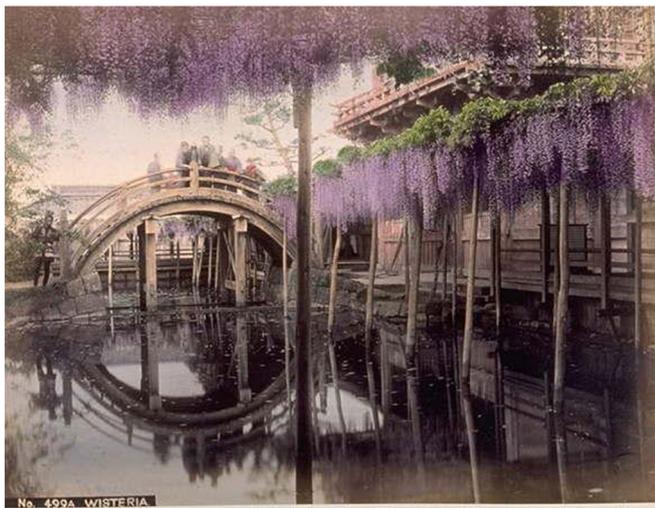
二曲一双の屏風絵。フジの花の華やかさ、幹のしなやかさと蔓の強さが鮮やかに表現されています。幹や蔓が屏風の中に扇状に広がり、重さを持った花房が画面に安定感をもたらしています。幹部は墨一色で表現されていますが、墨を背景の金地に透かして褐色に見せるという技法が冴えています。

## フジについて

フジは古来から日本で親しまれ、愛でられてきました。晩春に花房が垂れた見事な姿を見せ、ツル性植物特有の幹がしなだれかかる様子は「女性」に例えられます。令和6年から発行予定の新五千円札の顔、津田梅子の裏の図版にもフジが選ばれました。

フジはマメ科フジ属の落葉性ツル植物。日本固有のフジはノダフジ (*Wisteria floribunda*) とヤマフジ (*Wisteria brachybotrys*) があり、他にも中国原産のシナフジ (*Wisteria sinensis*) があります。新五千円札や応挙の作品に描かれたフジはノダフジです。ノダフジは花房が長く、長さ1mを超えるものもあります。

ノダフジの原種は大阪市福島区野田付近にあったといわれます。明治時代以降の都市開発によってフジの景勝



亀戸天満宮の藤棚と太鼓橋、心字池（明治初期）

は一旦消失しましたが、昔からこの地にはノダフジが群生し、フジの名所として知られていました。室町時代には將軍足利<sup>よしあきら</sup>義詮が住吉詣の途中でこの地に立寄りフジを觀賞し、和歌を詠んでいます<sup>※</sup>1。一方、関東にも古くからのフジの名所が多くあります。そのひとつは東京都江東区の、菅原道真を祀る神社として親しまれる亀戸天神社です。境内には100株以上のフジがあり、江戸時代には歌川広重の「名所江戸百景」に境内のフジと太鼓橋が描かれました。現在も東京を代表するフジの名所として賑わいます。明治初期の写真にも心字池を囲んだ満開のフジが写されています(左

図)。

現在では、美しい藤棚の風景は国境を越えて愛されています。栃木県足利市の「あしかがフラワーパーク」では1994年から1996年にかけて樹齢150年ほどの大フジ4本を園内に移植して無事に根付かせました。今では様々な色のフジの大棚や仕立てが見られます。福岡県北九州市の「河内藤園」には3,000㎡を超えるフジの大棚があり、満開時の様子は壮観かつ、幻想的です。いずれも米ニュースチャンネルCNNが選ぶ「2014年の世界の夢の旅行先10か所」「2015年日本の最も美しい場所31選」や、海外サイトFeedbox「実在する世界の美しい場所10選」に選定されました。このフジの花の絶景を見るために、毎年世界中からたくさんの観光客が訪れています。

### フジの種類



ノダフジ系（日本原産）  
つる：左巻き<sup>※2</sup>  
花房長さ：20-100cm  
葉質：薄い

上写真  
品種名：野田長藤  
(*Wisteria floribunda* DC.  
cv. *Nodanagafuji*<sup>※3</sup>)



ヤマフジ系（日本原産）  
つる：右巻き<sup>※2</sup>  
花房長さ：10-15cm  
葉質：厚い

上写真  
品種名：白花美短  
(*Wisteria brachybotrys* Sieb et Zucc.  
cv. *Shirokapitan*<sup>※3</sup>)



シナフジ系（中国原産）  
つる：右巻き<sup>※2</sup>  
花房長さ：15-30cm  
葉質：厚い

上写真  
シナフジ  
(*Wisteria sinensis* Sweet<sup>※3</sup>)

撮影場所：小石川植物園（東京都文京区）

※注 1

「紫の雲をやといはむ藤の花 野にも山にもはいぞかかれる」(貞治 3 年(1364)、室町幕府二代将軍 足利義詮が詠んだ歌)

※注 2

「右巻き」は「つる」の伸張方向を出発点(下)から見て、時計回りの方向。文部省、日本植物学会著「学術用語集 植物学編(増訂版)」(1990 年)の定義に準拠した。

※注 3

「学名」は小石川植物園設置の樹名板の通り。

《参考資料》

樋口一貴 著「もっと知りたい円山応挙－生涯と作品」東京美術 2013 年(アート・ビギナーズ・コレクション)

金子信久 監修「円山応挙 日本絵画の破壊と創造」平凡社 2013 年(別冊太陽 日本のこころ 205)

川原田邦彦 著「NHK 趣味の園芸 よくわかる栽培 12 か月 フジ」日本放送出版協会 2002 年

塚本こなみ 文 一関圭 絵「おおふじひっこし大作戦」福音館書店 2002 年(たくさんのふしぎ傑作集)

文部省、日本植物学会著「学術用語集 植物学編(増訂版)」丸善 1990 年

《参考 URL》

大乗寺 円山派デジタルミュージアム 応挙のお話 第 6 話

[http://museum.daijyoji.or.jp/06story/06\\_06.html](http://museum.daijyoji.or.jp/06story/06_06.html) (参照 2022-7-16)

広島の植物ノート 特集 植物の右巻きと左巻き(詳細版)

<http://forests.world.coocan.jp/flora/issue/issue-1b.html> (参照 2022-7-16)

《画像提供》

大学共同利用機関法人 国際日本文化研究センター